

広島俳句倶楽部

令和三年一月作品集

巖島——紅葉のころ——高尾ひとみ

巖島は、紅葉谷という谷もあるほど紅葉の美しい島です。

令和二年霜月、巖島を訪れました。薄紅葉、燃えるような紅葉、散り始めた紅葉、さまざまな紅葉を見ることができました。

今年の紅葉はたいそう美しい、そう思っていましたら、近くを歩いていた女性二人が、「こんなにきれいな紅葉は今年が初めて」と話す声が聞こえて、同じように感じる人がいるのだと、嬉しい気持ちになりました。

初冬の日の照り返す大野瀬戸

隧道に向かへば石路の花しづか

堀越しの山茶花を見て歩きたる

一葉つつ音もなく散る紅葉かな

せせらぎの兩岸に散る紅葉かな

山鳩のしばらく居たる紅葉かな

下りゆく石段に散る紅葉かな

竹垣に沿うて歩ける紅葉かな

参道の公孫樹黄葉を振り返る

分け入りて鳥のよく鳴く冬の山

《作品鑑賞》

村上正人

高尾さんは令和二年四月の特別作品でも『巖島』を詠まれたが、続編ともいえるこの度は、紅葉の頃の巖島を詠んだ作品となっている。特に全十句の中ほどに詠嘆の「かな」で締める印象的な「紅葉」が五句つづけて置かれ、直後に参道にて振り返る息を呑むような公孫樹「黄葉」の句を置いたことで、まるで美しい光景の写真集をめくる驚きのよう。一句一句が圧倒的な美として伝わってくる。この特別作品はテーマを決めた十句ならではの「構成の醍醐味」も味わわせてもらえる作品となった。

私の特に好きな句は次の二句である。

隧道に向かへば石路の花しづか

一葉つつ音もなく散る紅葉かな

十二月

亜矢

私は、自分の日常生活を十七音であらわすことを信条とし、決してぶれることのない芯を持って俳句と向き合いたい。

ユーモアのある医師の言実千両

初雪の新車に触れて消えゆけり

冬日和インコにしやべるインコかな

事細かく楽譜に書ける冬ともし

掲示板に掛けられてをり耳袋

年の瀬の夫の頭にインコのある

電柱に花束置かれ年の暮

折りたたみ短冊に切る古暦

靴下のかかとに穴のあり時雨

ソプラノのカンタータ聞く十二月

《作品鑑賞》

村上正人

亜矢さんはご自身でも前書きされているように、生活の中の情景を詠む作品を得意とされている。この度の特別作品『十二月』においては、人柄を想像させる医師、くもりのない新車、家族同様のインコ、趣味の音楽、愛情溢れる家族など、それぞれが作者から息吹を与えられ、味わい深い句に表現されている。これら一句一句は的確な季語を通して、日常生活を送る読み手にも自身の体験を思い起こさせるようなワンシーンとしてすっと入ってくるのである。私の特に好きな句は、音楽にまつわる次の二句である。後者は特別作品のタイトルにもなっている「十二月」がよく利いている。

事細かく楽譜に書ける冬ともし

ソプラノのカンタータ聞く十二月

佐保光俊

初鵜ふたつのビルを歩き来して
高くから鵜の鳴く四日かな

村上正人

御降や毘沙門天に灯の点り
午後になり背戸山覆ふ初霞

高尾ひとみ

初雀少し濡れたる枝に来る
御降の桜の枝に雀来る

阿姫

新しき日捲り暦連れとせり
年玉に雪と雀を描きくれし

あづみ

海へだて宮島見ゆる初景色
お正月余良の布巾を使ひけり

亜矢

石段をゆつくり上り初詣
初御籤あれこれ迷ひ引きにけり

井藤希

山の端に濃き日の昇る大旦
鎮まれる杜に声して初鵜

栄吉

御社の人を離れて初鵜
鍛冶目礼をして過ぎにけり

大橋博子

初御空胸の懐紙の清しかり
船の波平らに寄する四方の春

敬子

初苗とんび大きく輪を描いて
稜線をゆるりと昇る初日かな

暁子

雲切れて弥山に差せる初日かな
年の朝しきりに鳥の来て鳴けり

新庄憲孝

交番は巡回中や初国旗
初鵜南京櫓の実を啜へ

知佳子

初鵜安芸の小富士の方へ飛ぶ
大柄のエプロンをして女正月

ちどり

母が家の裏の祠に鏡餅
賀状手に子ども頃を話す母

友岡崇山子

仏壇に夫の灯せる初灯
新しき筆の穂を噛み初硯

ふじ女

トランクを自在に滑る破魔矢かな
初神籤はスマホに撮って送るもの

松田裕子

鳶と鳶いつきに上がる淑気かな
墨を磨る指に日の差し初硯

松本恵和

御降の中の門扉を開きけり
御降の夜のなかなか寝付かれず

美耶

また一人鳥居をくぐる初詣
寄せ植ゑの一つ咲きたる福寿草

森口良樹

昨夜からの雪の庭先初景色
スマホから孫へ振り込むお年玉

英一

ぜんざいに鏡開きの餅を入れ

遠藤さつき

初暦アールグレイを淹れて見る

大畑恵

元旦の碎ける波の岬かな

かこ

新年を古き神社に参りたる

上島康子

人けなき小さき社年始

紀英子

新年の御堂にかくも長く居り

熊谷ゆり子

御神木仰ぎて並ぶ初詣

桑門わかこ

子の去りし三日の午後のあたたかさ

清水弘通

年賀状二枝の届く晴の昼

白神陽子

ありふれた日でありながら三日かな

高嶋彌代

あらたまの月の真上に照りにけり

民

西空も茜に染まる初日かな

ちかこ

初日記マスク洗ふと書きにけり

津田玲子

災害の山も輝き年迎ふ

撫子

にこやかに老いる母あり去年今年

穂高

乳飲子の黒き瞳や年新た

幹

ふるさとの味の通りの雑煮かな

みさ子

初詣コロナ封じの絵馬多く

山野ウタ

門を出て御降にふれ女の子

宮田保江

恩師より届きし賀状読みにけり

やす保

三ヶ日東に西に宮参る

山崎桂子

日の出前仕事ある子に雑煮づく

都賀尾への道に獺犬鍛へをり

大榎しきりに木の葉落としけり

落葉道雨乞山に到りけり

落葉搔橋を渡つて帰りけり

蘆は枯れ山は北へと続きたる

雪催鶯を構ひにゆく鴉

初雪や声を惜しまず鴉鳴き

本堂に寒禽のよく聞こえけり

冬の鳥こよなき声で鳴きにけり

裸木に夜の白雲の通りけり

放送で下校促し日短か

杖をつきゆつくり歩む冬苗

初雪の舞ふ町並を見下ろしぬ

坂道の上なるカフェの冬灯

冬北斗ときをり見上げ帰途の坂

手の甲でバックミラーの霜拭ふ

冬の露大き日輪上りけり

手の甲の胼に消毒液の沁み

寒菊を頂く父の命日に

風音に人声紛れ冬の海

風やんで紅葉一枚づつ散りぬ

ブランコを漕ぐ子らとゐて冬紅葉

窓越しに落葉掻きする音のして

一本に小鳥あつまる冬日和

出掛けんと見る窓に初雪の降る

初雪のたちまち消ゆる袖の上

寒菊の咲きたる家を訪ひにけり

凍雲を見上げいつもの道をゆく

遙かには雪の覆へる山のあり

雲ひとつ浮かびて冬の空青し

佐保光俊

村上正人

高尾ひとみ

鬼柚子の四五個の枝に残りたる

母編みし膝掛に猫箱座り

窓越しの雪嶺を見て湯につかる

梟の声本堂に届きたる

十二月ムシカにピアノ曲を聴き

初夢は雪舟庵に墨を磨る

一人住み火の番了と声に出し

節分草「いのち」の本を読みはじむ

御社の鳥居の奥の芽吹きかな

生籬の一つ咲きたる紅椿

阿姐

島浦に日のゆき渡り海鼠舟

足裏でさがす毛布や夢見つ

相寄りて家族で初日仰ぎけり

元旦や国旗はためく警察署

囲まれて米寿を祝ふ初写真

石積の隙間に咲いて仏の座

御降やかすかに見ゆる巖島

四日はやチエンソー響く栗林

臘梅の匂ふ宇野千代生家かな

大寒や米寿としてのストレッチ

あざみ

病棟の上冬満月の上がる

冬の暮自転車に積む大事典

鞆のかかどに触るる夜更けかな

冬ぬくし肩から肩へ飛ぶインコ

ドアの音に鳴き出すインコ日短か

初雪や子の好物を煮炊きして

数へ日の川の流れを見てをりぬ

初春の日を浴びてゐる獅子背

冴ゆる夜の樂譜に閑きぐせをつけ

片手づつシンヨパンをさらふ春隣

亜矢

木守柿鴉は遠く飛びにけり

小屋掛けて大笑ひして牡蠣を焼く

物音に犬の構へる夜半の冬

枯木道石の地蔵の並びたる

街なかの年の瀬の音妻と居て

元旦の船の近づく大鳥居

元旦の鶯鳴く空の広きかな

初風の臥龍の松に吹きにけり

歳旦の車の雪を払ひたる

冬晴の浜に老松並び立つ

冬の霧赤き灯りの浮かびたる

一人居て眠りの浅き霜夜かな

初雪や朝の大気の新しく

土凍みてジョギングの音聞こえ来る

脇道を選ぶ人あり初詣

年迎ふ鉛筆五本削りたり

ハンカチのやうやく乾き実千両

一番に朝日を受けて冬の梅

ぬかるみに足止めて見る冬の梅

竹馬や間近にありし父の髭

毒ガスの島の灯りて日短か

霜の朝獣の跡の点々と

山かげの道はの暗き花八つ手

雪もよひ竹の葉擦れの音のして

裸木の高きに蔓の絡みたる

底冷の工場の裏油臭き

あちこちに継ぎのしである障子かな

魚屋に釣り銭を受く手の凍てて

早春や胡椒の香る目玉焼

春寒のコーヒーの湯気ゆらゆらす

井藤希

栄吉

大橋博子

冬紅景越しに見えたる雲白し
 冬浅し夕日に染まる舳ひ舟
 枯木立透かして朝日上りけり
 冬日差す瀬に佇みて驚一羽
 稜線の本々の間に初日かな
 初日の出仏舎利塔に掛かりたる
 風花やいつもの土手を散歩して
 枯柳洞より雀飛び立てり
 玉椿咲きたる庭に佇みぬ
 玉椿七十七の我に咲く

敬子

日のあたるところが香り冬の菊
 花八つ手寺は線路に面したる
 入れ替り鳥の来てゐる冬至かな
 湯上りの赤子に柚子の香りたる
 冬の虹消えて遠くに舟の見ゆ
 大絵馬を掛け替へてをり冬の朝
 絶え間なく鳥の声する冬木立
 バット振る音のしてゐる年の朝
 今朝もまた塀に並びて寒雀
 炬燵から軒の雀を見てをりぬ

暁子

うづ高くクリスマスケーキ積んであり
 日本酒を火事見舞とて提げて来る
 カーブする車内を移る冬日影
 バケツにもその持ち手にも雪積もる
 花梨の実落ちたるままに年を越す
 初晴や突堤過ぐる内航船
 竹箒立て掛けてある枯木かな
 小魚の群れてをりけり寒の水
 引かれたる赤大根に目白くる
 植込みの下の地面に雪残る

新庄憲彦

城までの細き坂道石路咲いて
 大樟を通つてゆける時雨かな
 松の景の一本づつの凍りつく
 夕暮の温みの残る落景かな
 冬林檎二つに割れば蜜香る
 ベビーカー押して通れる冬木立
 枯蓮の影の重なる城の濠
 降る雪に灯りの見えて太鼓橋
 鳴きながら日に向かひたる寒鴉
 山腹に動く人影春近し

知佳子

初雪や列車で母を訪ねたる
 母が家の冷たき水で蕪洗ふ
 炬燵から顔だけ出して母休む
 外にまで聞こゆる祖父の嚏かな
 餅を搗くそばに赤子の眠りをり
 一人居の母のところて年を越す
 母が家に圍の中より除夜の鐘
 除夜の鐘母と炬燵で聞いてをり
 真夜中の母屋の雪の滑り落つ
 雪の庭に足踏み入れる女の子

ちどり

冬夕焼夕餉の窓を染めにけり
 まづ熱き汁から吸ひし寒さかな
 雪降るや積もらぬ前に葉を摘まん
 年立つや愛犬の鼻黒く濡れ
 旅の本眺めてゐたる寝正月
 我を見て何か掠ひて初鴉
 雪月夜二人静かに酒を酌む
 粉雪の降りてタオルで拭ひたる
 欠伸する人と目が合ひ暖房車
 寒椿赤き蕾の三つ四つ

友岡崇山子

初詣インドカレーの帰り道

座布団のくぼみに浮かぶお年玉

雑煮餅ゆつたり朝の塗りの碗

門松の竹にかぐや姫おらず

良友のランニング知る年賀状

買初の鯛を見ていた人も消え

顔に手を触れることなく雪ちらら

長靴で圧を氷のサスペンス

あかぎれを削る華やかなる機器よ

窓の雪手にパンパイアの伝説

ふじ女

花八つ手浜辺の残る埋立地

ふり向けば目の大きくて冬の鹿

窓すこし開けて聞きたる除夜の鐘

まづ一度深く息して筆始

書初の父の背中に日のあたり

初荷積み定時に貨物船の出づ

校門に自転車置かれ雪の朝

庭に来て小石をつく寒雀

寒肥の古木は父の遺愛の木

御社の森を寒禽飛び交ひぬ

松田裕子

妹の来て置きくれし花梨の実

草の霜踏んで入りたる畑かな

山眠る墓への道を辿りをり

二三人バス降りてくる霜の夜

豆を炊く窓に見てゐる雪嬬

目覚むれば天心にあり冬の月

玄関の壺の寒菊香を放つ

雪降るや舞ふ鶯の羽大きくて

風花の地面にふれて消えにけり

笹鳴に踵を返す小道かな

松本恵和

草叢の霜に朝日の差し始む

風の坂の上より吹いて来る

冬晴や空から雀降りて来し

初雪の一つひらひら消えてゆく

東京の電話に聞こゆ除夜の鐘

元旦の庭木に鳥のやつて来る

初風の瀬戸の島々近きかな

ベランダの鈴に水やり年新た

初雀軒下に来て遊びをり

鉄持ち稍古に向かふ年始

美耶

講堂に部課長集め事始

玄関に傘を渡され雪催

鯛焼の一つは祖母に買ひにけり

入院に向かふ列車や風花す

消灯のあとの病室誰か咳く

病床に小さき咳の憚れる

朝時雨術後の傷のまた疼き

凍つる夜の足音過ぐる長廊下

バーボンの香るスタンド寒夜なり

夕映えのステンドグラス冬館

森口良樹

雲降る静かな夜に母思ふ

深々と積もる雪あり年の暮

初春の波濤厳しき三段壁

嫁よりのラインに白き雪景色

庭椿ほのかに紅き蕾かな

おぶはれて咲きたる椿見つめし日

山椿小道に落ちて赤きかな

山椿咲きたる先に祖母の郷

足摺の岸壁にあり山椿

大畑恵

戸を緑れば初雪の景眩しくて
まづ屠蘇を酌みてより箸割りにけり
巻く紐は年輪のやう独樂廻し
御降に散歩の足を弛めたる
湯たんぽを抱へ幼子眠りをり
標を履いて歩ける霧の中
烈風を受くる樹氷や恐羅漢
海鳴の崖に咲きたる水仙花

宮田保江

山茶花の蕾の一つ花開く
牡蠣筏鳥居に向かい並びをり
海澄んであまたの牡蠣に日の差せる
女房の変はりなき身や年新た
下駄の音響く回廊初詣
コロナ禍のせめて晴着のお正月
こんがりと焼き目を付けて餅を食ふ

英一

エアコンをつけては消して冬ごもり
ポケットの鍵の冷たい自宅前
大晦日ひと風呂浴びて蕎麦を食ひ
一月の風に吹かれて深呼吸
気まぐれな十日遅れの初詣
一月の空を仰ぎて星ひとつ
一月の波穂やかに太田川

清水弘通

コトコトとゆで卵して冬の朝

短日の仕舞つてゐたる果物屋

雪掻のシャベルが三つ立ててあり

霜晴や寺へと急な坂上がる

短日の墓に参りて帰りけり

黒猫の鈴鳴つてをり冬座敷

桑門わかこ

重ね着し日がな一日部屋を出ず

日向ばこ嫁の悪口聞き流し

年の暮昭和の歌の流れ来る

ひたすらに生きて今宵の除夜の鐘

日の出前ゆるりと毒寿の初湯かな

編みくれし真つ赤なミトン年祝

白神陽子

雪の道人の影なく真直ぐなり

寒雷の夜を二階に居りにけり

懐炉入れ身をいたはりて日々過さす

悔しさをバネにして引く寒の紅

雪解の日ざし山門くぐりけり

紀英子

折々に母のこと書き日記果つ

風通る背戸に並べて大根干す

身籠りし姪晴れ晴れと年賀客

初景色雪雲のこる北の山

真つ直ぐに伸びたる瑞枝梅ふふむ

山野ウタ

袖子の香のホットタオルにうたた寝す

年惜しむ配信ライブにぎやかに

餅つき機踊る餅見に子の来たる

山崎桂子

年賀状今年限りと添へてあり

手作りの泣連飾掛け村の家

遠藤さつき

封筒に木の葉一枚入れておく

新年のあいさつをする葉書かな

かこ

年賀状郵便受の前に待つ

成人式晴着の裾を気にしをり

上島康子

門前の葉牡丹茎を伸ばしたり

自販機の明りの照らす雪霰し

熊谷ゆり子

駅伝の襷を渡す息白し

雪折の竹の線路を塞ぎたる

高嶋 朔代

鉄塔の間による初日かな

初日の出ビルの間に上りけり

民

ピンク着てひとり茶を愛で女正月

寒雀竿の雫を揺らしたる

ちかこ

暖かな光はあれど肩寒し

濃茶汲み春を待ちたる老夫婦

津田玲子

歳時記をめぐり一月始まりぬ

植込みを荒らして逃ぐる寒鴉

撫子

あらたまの乳児の笑みのこぼれたる

スネボーを父に教はる冬休

穂高

雪もよひ鳥は罫に急ぐらし

新年の祝賀コナで控へ目に

幹

手作りの泣連縄飾る隣かな

子の無事を三社に願ふ初詣

みさ子

餅搗の杵音ひびく路地の奥

粉雪の舞ふを眺めてガラス越し

やす保